



FUTURE SESSIONS

IMPACT REPORT 2025



はじめに

インパクトレポートを通じて 対話の社会的インパクトを問い直し、 社会とともに、育ち続ける。



株式会社フューチャーセッションズ（以下、FSS）は、2012年の創業以来、「対話には、未来を変える力がある」という信念のもと、多様なステークホルダーを招き入れ、複雑な問題を共創によって解決するための創造的な対話の場「フューチャーセッション」を提供してきました。

私たちがフューチャーセッションを通じて大切にしてきたのは、異なる価値観や立場を持つ人々が、対話の中でお互いへの理解を深め、誰もひとりでは思い描けなかった未来を、ともに描き、自分ごととして動き出すためのプロセスです。そこには、トップダウンの意思決定では生まれない、しなやかな変革の力があると信じています。

複雑さが増す社会課題に向き合うとき、「正しい答えを持つ誰か」を探し続けることの難しさを多くの方々が感じているのではないのでしょうか。

私たちはそうした現場に寄り添いながら、ファシリテーターとして、異なる価値観や思いを持つ人々がつながり、既存の枠組みを越えた、新たな選択肢が生まれる瞬間をともに育ててきました。

このような対話による共創のプロセスが、どのように波及し変化をもたらしたのか。誰かの意思決定に影響を与え、組織や地域にどのような動きを生んだのか。私たちは常に、そこに誠実に向き合う必要があると考えています。

本レポートは、その問いに対する、私たちなりの新たな試みです。

私たちが掲げるパーパスやロジックモデルに照らし合わせ、これまでのプロジェクトの歩みと、そこで生まれた価値を振り返ります。外部への報告である以上に、自らの活動を見つめ直し、次の歩みをより確かなものにするための内省の記録として、このレポートを皆さまにお届けします。

対話を通じて、社会とともに育ち続けること。

このレポートを通じて、私たちの現在地を透明性高く開示し、より良い未来を実現するための次の一歩を皆さまと共創していきます。

Index

はじめに	1
Purpose	3
提供価値	4
Future Sessionsの歩み	5
Impact of Future Sessions	6
インパクト測定のための準備	7
主な成果	8
企業共創プラットフォーム	9
地域共創プラットフォーム	11
共創総会	13
OUR FUTURES	14
問い集2025	15
COLUMN 会社のハンドルを「共奏」で握る。ソーシャル領域の事業組合「社会藝術舎」とこれからのフューチャーセッションズ	18
未来の兆し	21

Purpose

複雑な問題への認識を対話で大転換させ、
ワクワクする未来を共創する。



複雑な問題とは

最適解がなく、
専門知や問題の分解では
解決できないもの

対話とは

特定のトピックに関して
お互いの意見の違いを
理解しあい、質問によって
相手の知性を引き出す、
言葉を通じたやりとり

ワクワクとは

かかわりあう人たち
みんなが期待や喜びを
感じている状態

共創とは

最適な関係者が集い、
多様な知を持ちより、
一人では生み出せなかった
想定外と行動を生み出すこと

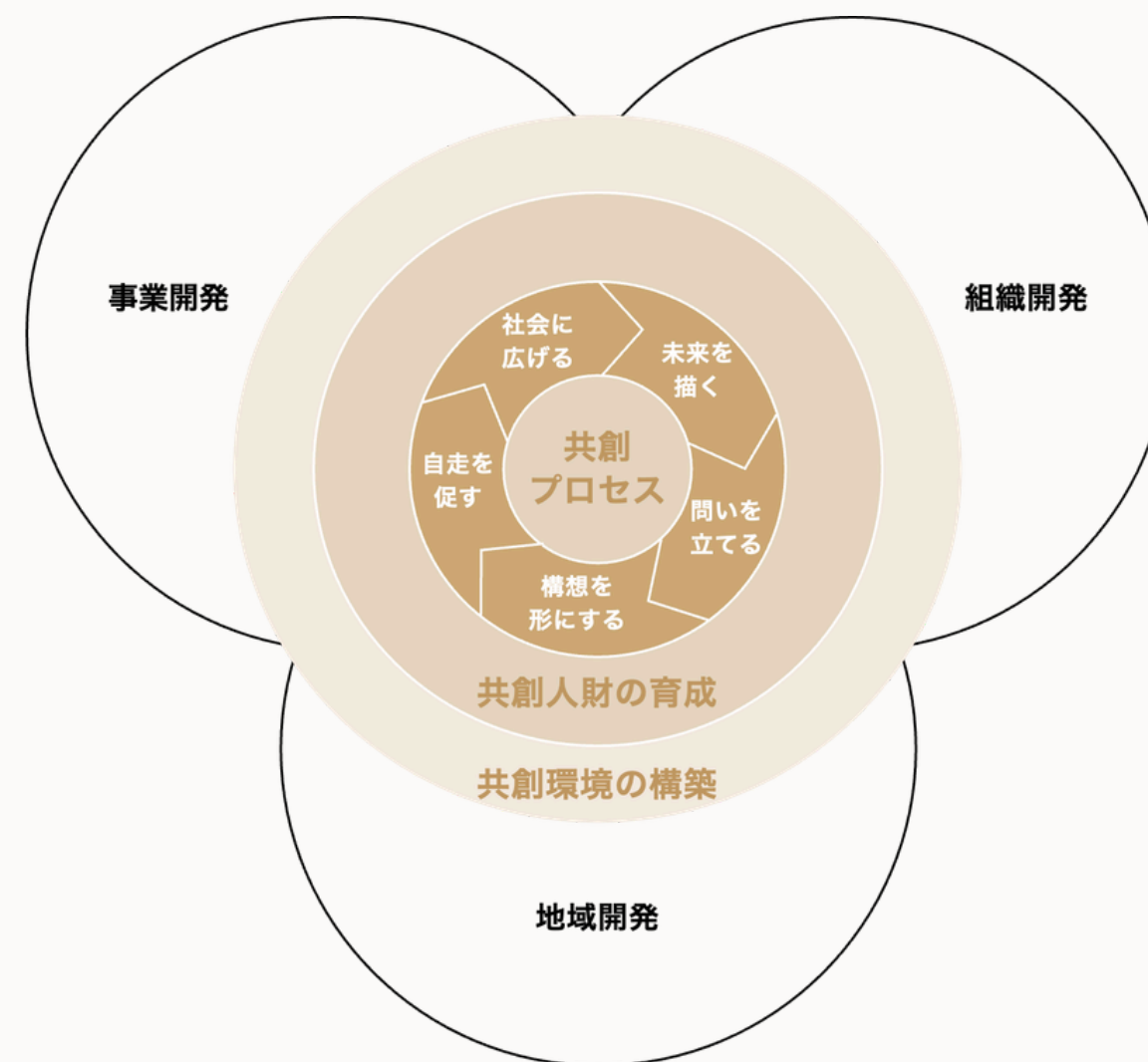
大転換とは

従来の二項対立に
絡めとられず、
それまで持っていた認識とは
全く異なる認識に変わる事

提供価値

共創を軸にしたプロセスデザインによって、
「一人ひとりが信じられる未来の実現」につながる、
事業開発・組織開発・地域開発のプロジェクトを推進しています。

また、これらの実践を通じて培った知見をもとに、
「共創人財の育成」と「共創環境の構築」を提供し、
自走する組織・地域の創出をめざしています。



共創態度

社内外分け隔てなく、共創を起こしやすくするための行動・振る舞い

未来に心地よく
いられるような発想をしよう

積極的に情報・知識を
共有しよう

新鮮な気持ちで問い続け
試行錯誤しよう

役割を超えて臨機応変に
相互支援しよう

みんなが参画できるように
配慮しよう

プロジェクト内でもチーム制を採用し、社内対話を起こす工夫をしています。

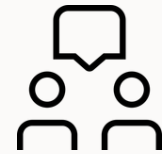
Future Sessionsの歩み

東日本大震災を機に、環境問題や社会課題を人任せにせず、一人ひとりが自分ごととして捉え、自律分散的に社会変革を起こしていく必要があると感じたことから、創業しました。

2012.6
創業

様々な組織や個人が、セクターを越えた対話と協調アクションで社会にインパクトを起こすことを目的とした1週間のイベントを、6年間にわたり実施しました。

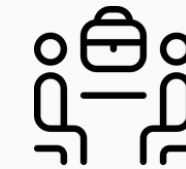
2012-2017
Future Session Week



組織内外で活躍するファシリテーターを支援するWebサービスを開発。セッションで生まれたアイデアの共有やレポートを行うプラットフォームで、4,500件を超えるフューチャーセッションの開催を支援しました。

2013
対話支援の
オープンソース化

フューチャーセッションの手法を活用し、企業の組織変革や新価値創造を支援。部署・専門性を越えた対話の場を設計・伴走し、協働と内発的な変化が生まれています。



2016
組織開発PJ始動

市民、地域事業者、流通などのステークホルダーと共に地域課題を解決しエシカルフード市場を形成するプラットフォームを構築。持続的に良質な商品が生まれ、選ばれる仕組みを社会に広げています。

2021
事業開発PJ始動



2012-2015
助け合いラボ

高齢化が進む地域で、行政・企業・市民がセクターを超えて自律的な助け合いの仕組みをつくりました。鎌倉・調布・高松の3地域で持続可能な地域コミュニティのあり方を探るセッションを重ねたことは、その後のFSSのモデルケースでもあります。

2013
イノベーション
ファシリテーター講座始動

社会変革に必要な「問いをつくる力」「多様な人を招き入れる力」「行動につなげる力」を研鑽し、企業・自治体・地域で対話をリードする担い手を育てる講座を開講しました。



2016
まちづくり共創支援始動

渋谷、足立区、山口といったフィールドで、企業・NPO・市民・行政など多様なセクターとの協働から生み出されたアイデアにより、地域の社会課題を解決していくコレクティブインパクトプロジェクトが始動。

2020
リビングラボ始動
(産官学民共創プロジェクト)

多様なステークホルダーを招き入れながら、地域をフィールドにした社会課題に対する実験的な取り組みを各地で推進しています。このリビングラボから生まれる地域ならではの新たな価値創出を支援しています。

Impact of Future Sessions

Future Sessionsが創出するインパクトについて、社内で対話し図化しました。

組織開発

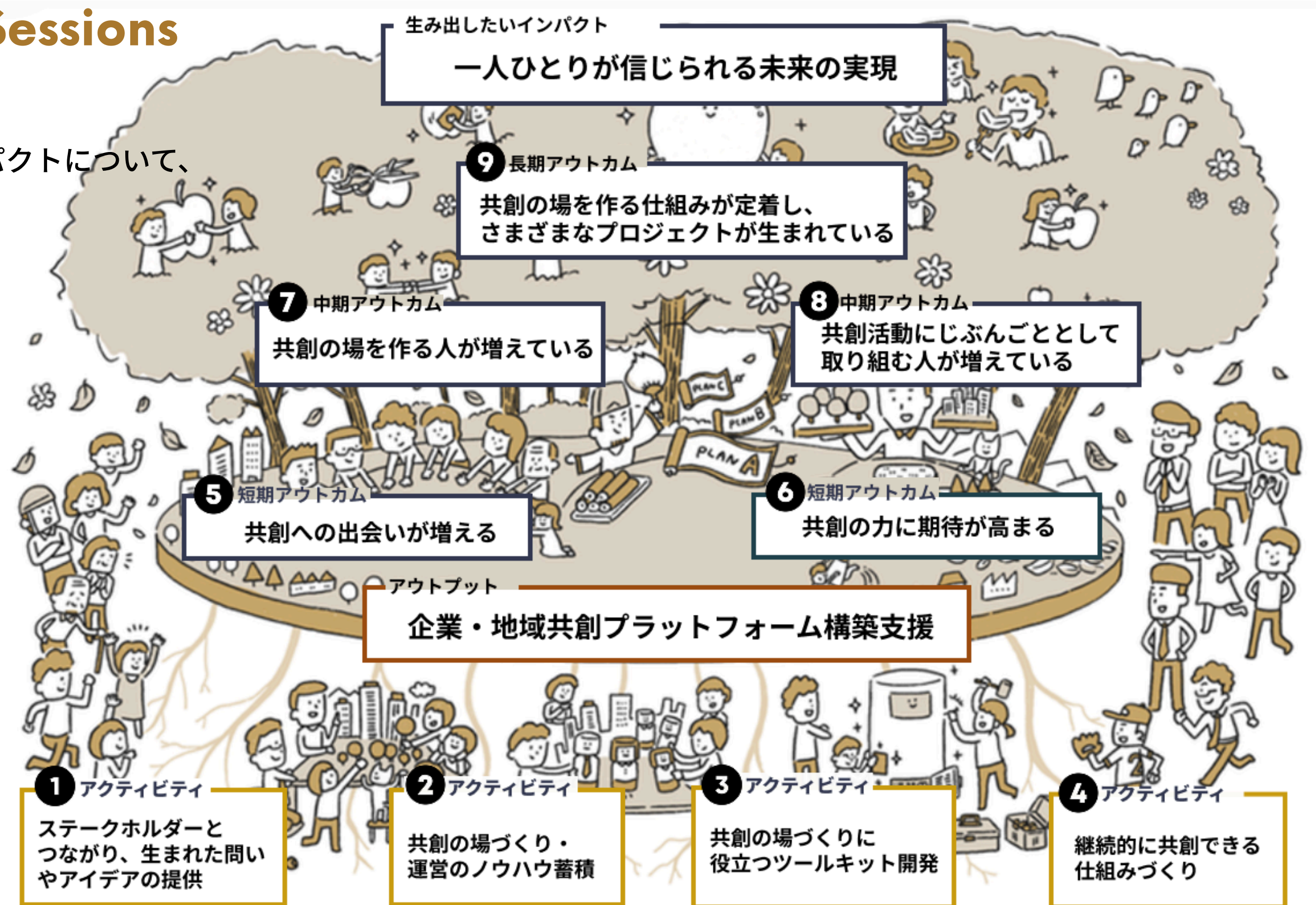
組織のあるべき姿やありたい姿を描き、行動を変化させていくための環境設計

事業開発

魅力的な問いとアイデア創出手法によりコンセプトを創造。自律的なチームを形成しながら事業モデルを検証

地域開発

企業・NPO・市民・行政などと共創コミュニティを形成し、社会実装の促進を支援



インパクト測定のための準備

ここでは、前ページのインパクトロジックモデルをもとに、「共創の場を作る仕組みが定着し、さまざまなプロジェクトが生まれている」という長期アウトカムを達成するためのインパクトマネジメントに取り組むにあたり、測定の準備として策定いたしました。

インパクトマネジメントとは、私たちが未来にどのようなインパクトを生み出していきたいのかを思い描き、その実現に向けて、事業活動を振り返り、学び、軌道修正していく営みです。

一方で、共創によって生まれる変化には、数値だけでは捉えきれないものが数多くあります。

「どのような変化を大切にしたいのか」「どのような行動や兆しを見つめていきたいと願っているのか」を示す羅針盤として、短期・中期・長期それぞれのアウトカムと、その変化の兆しを整理しました。セッション数や参加者数以外に、今後は以下のような状態変化を見つめることで私たちも、更なる進化・深化を遂げていきます。

評価計画（簡易版）

	目指す状態像	評価指標	収集方法	測定方法
①アウトプット	企業・地域共創プラットフォームの構築を支援する	<ul style="list-style-type: none"> セッション開催数 セッション参加者数 	<ul style="list-style-type: none"> 業務データ 	<ul style="list-style-type: none"> セッション件数と参加者総数を集計
②短期アウトカム	共創への出会いが増える共創の力に期待が高まる	<ul style="list-style-type: none"> 共創態度の発現度 自発行動の発現度 	<ul style="list-style-type: none"> 業務データ 参加者アンケート 	<ul style="list-style-type: none"> 終了時と総会でアンケート実施
③中期アウトカム	共創の場を作る人が増えている共創活動にじぶんごととして取り組む人が増えている	<ul style="list-style-type: none"> 共創プロジェクト件数 関係の深化度 共創の拡大度 	<ul style="list-style-type: none"> 業務データ アンケート 	<ul style="list-style-type: none"> 問い合わせからプロジェクトの数を把握 終了時と総会でアンケート実施
④長期アウトカム	共創の場を作る仕組みが定着し、さまざまなプロジェクトが生まれる	<ul style="list-style-type: none"> 共創事例 社会への波及度 	<ul style="list-style-type: none"> ディスカッション 事例収集 	<ul style="list-style-type: none"> エピソードを自社メンバー持ち帰って可視化

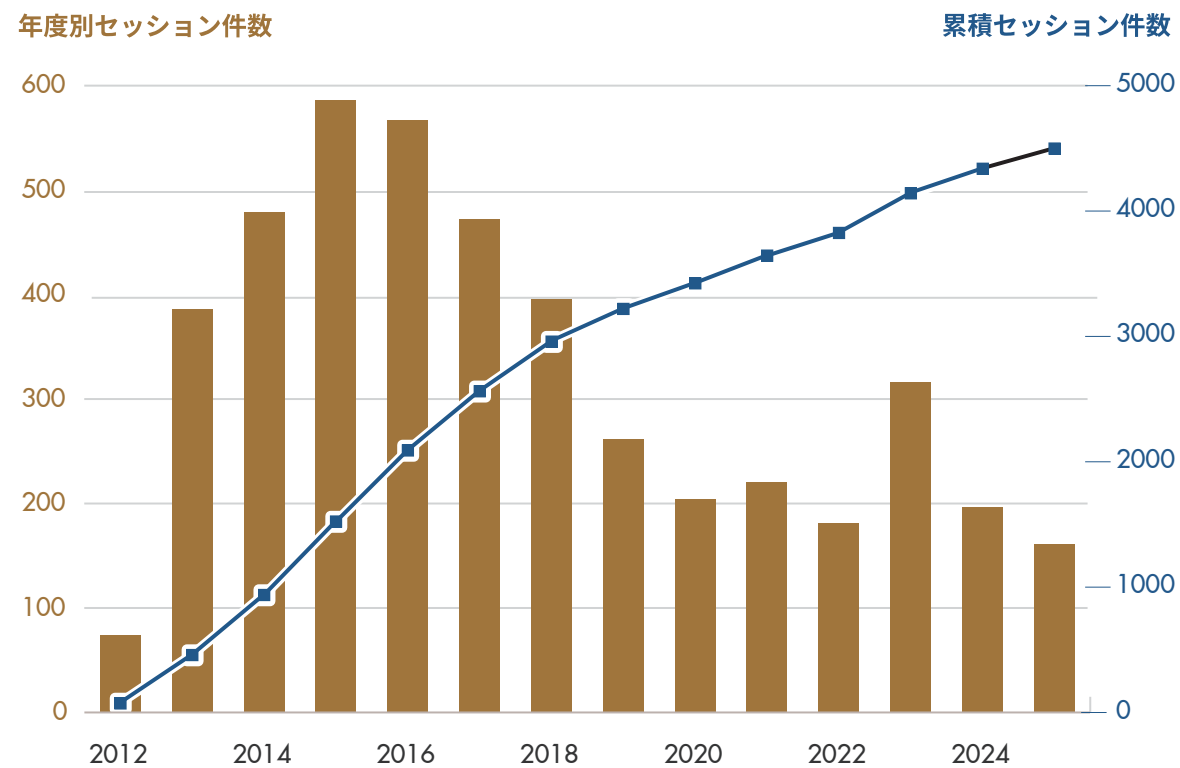
※太字は今回測定した指標です。引き続きすべての指標のデータ収集に取り組み、インパクトをより深く理解・改善していくことで、活動の質を高め続けていきます。

主な成果

定量

OUR FUTURES の実績推移 (2012-2025年度)

セッション件数の推移



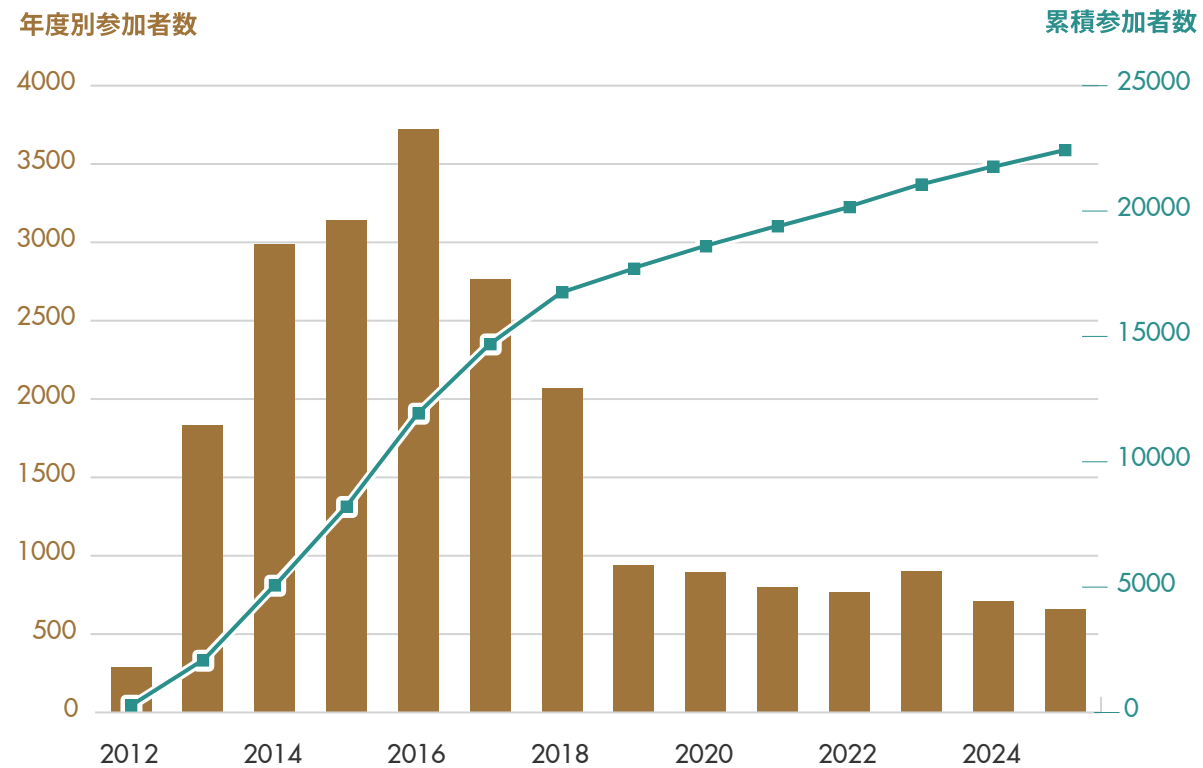
2012-2025 年度 累計セッション件数 | 4,500 件

2016年頃までは、地方創生やオープンイノベーションの文脈で、地域や企業でもオープンにフューチャーセッションが開催されました。2020年前後にコロナ禍に入ると、リアルでのセッション開催が難しい時にはオンラインで場を重ねる時期もありました。

対話やセッションを通して共創するニーズは、時代が変わらずあると信じ、これからもセッション数を全国に広げていきたいと考えています。

※「OUR FUTURES」に登録された年度別セッション件数、年度別参加者数から算出し、年度は4月～3月で集計。セッションを開催しても「OUR FUTURES」に登録していないケースもあるため、以下の数字は最小数字でさらに多くのセッション数、セッション参加者数があります。

参加者数の推移



2012-2025 年度 累計参加者数 | 22,438 人

参加者は、セッション数と比例して増減する傾向があります。またテーマタグをたどると、未来思考の場であり、時代よりも少し先取りしたテーマが多く、その時々の子会の揺らぎや、新しく生まれつつある問いを受け止めて熟成させる役割を果たしてきたことが見えてきます。これからも私たちは、新しい時代を形づくる問いやテーマが行き交う共創の場を生み出していきたいと考えています。

定性

参加者・関係者の声から見た変化

(1) 個人の変容

- ・自分の関心や経験を起点に、社会とのつながりを捉え直す機会を生み出してきた
- ・対話を通じて「自分も関われるテーマ」と出会い、行動のきっかけを見出す人が増えた

(2) 組織の変容

- ・部門や立場を越えた関係づくりを促し、課題や可能性を共有する機会となった
- ・組織内外の知恵を活かし、新たな事業や取り組みを生む土壌が育まれている

(3) 地域の変容

- ・多様な住民・事業者・行政が集まり、地域の未来を共に考える機会
- ・地域に眠る資源や課題を可視化し、継続的な協働の動きにつながっている

(4) 社会の変容

- ・多様な主体が共に問いを立て、未来をつくる重要性が高まっている
- ・対話と共創を、社会の意思決定や変革の基盤として広げている

企業共創プラットフォーム

企業共創プラットフォームとは

企業が主体となって、新価値創造を目指す共創の場です。自治体や市民、専門家が立場を越えて集い、創造的な対話の場「フューチャーセッション」を通じて、社会課題の解決や新たな価値創出を狙います。自ら実装したい企画を生み出し、その企画を後押しするための関係性を構築し、持続的なエコシステムの形成を目指します。

Projects

エシカルフードエコシステムの構築

カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社と共に、生活者・流通・メーカー・有識者などが参加する共創の場「エシカルフードラボ」を設計。食を起点としたエシカルな選択肢と新たな事業・社会価値の創出に取り組みました。

詳細リンク：[みんなのエシカルフードラボ](#)

エシカルフード基準
みんなのエシカルフードLABO

企業評価

- 環境**
 - 環境報告
 - 気候変動
 - 汚染と廃棄
 - 生物の生息域と資源
- 人・社会**
 - 人権
 - 労働者の権利
 - サプライチェーンマネジメント
 - 無責任なマーケティング
 - 地域/コミュニティ/社会への貢献
- 動物**
 - 動物の福祉及び権利
 - 動物実験
 - 工業的畜産または集約的畜産
- 政治**
 - 議論のある科学技術の利用
 - 政治活動
 - 反社会的財務活動

フード評価

- 調達**
- 包材**

Chemistry for innovation SYNERGYCA

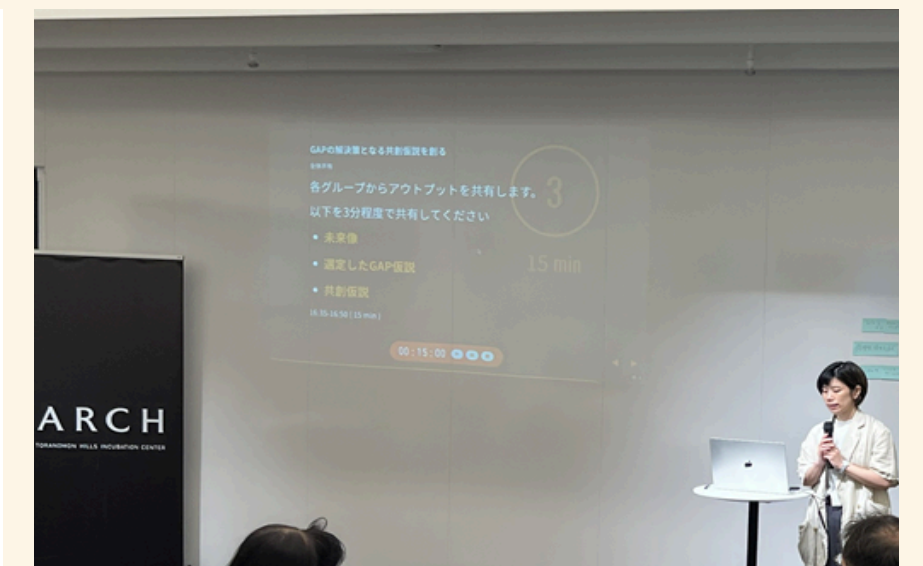
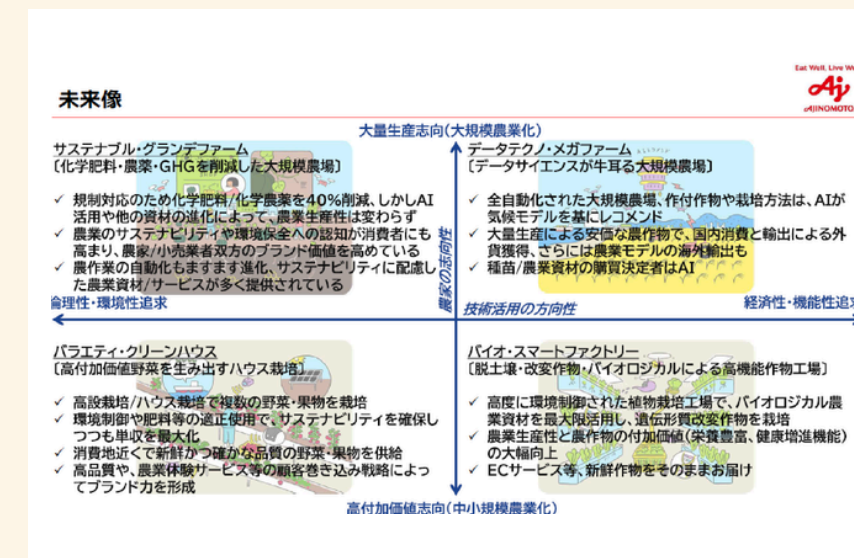
住友化学の共創ラウンジ「SYNERGYCA (シナジカ)」は、産官学など多様な来訪者が技術を“見て・触れて・体験” (VR等) し、専任ファシリテーションと議論の可視化を通じて新規事業・社会価値の共創を加速する場です。詳細リンク：[SYNERGYCA 共創ラウンジ](#)



味の素株式会社 価値共創セッション

味の素(株)の研究部門とともに、農業に関する未来探索の共創プロジェクトを実施。マクロな観点から未来シナリオを作成しました。またこのシナリオを活用し、未来課題の解決策となる新規事業・研究開発テーマの可能性を異業種20社で探索しました。

詳細リンク：[味の素株式会社 イノベーションスペース](#)





エシカルフードには、世界が抱えるさまざまな課題が深く関わっています。
私たちは、多様なステークホルダーとの対話を重ねながら、持続可能な食につながるエシカルフードアクションをともに考え、行動する共創型プラットフォームを構築し、よりよい未来につなげるソーシャルインパクトの創出を目指しています。
今後は、エシカルフードを社会に広げるための事業づくりにも取り組んでいきたいと考えています。

カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社 瀧田 希様



取り扱うテーマが幅広いことや、社内外の多様な参加者が集う場において、場の目的や参加者の状況に合わせてセッション設計を柔軟に変え、ファシリテーションすることの難しさを毎回実感しています。テーマオーナーとの事前設計打ち合わせ、セッション終了後の振り返り、毎月のスプリント会議など、運営の仕組みづくりにおいてもSYNERGYCAの皆さんとの共創を実践しています。

SYNERGYCA担当 宮武

できたこと

セクターや業界を横断する多様なプレイヤーが集う共創の場を設計・運営してきました。具体的なアクションを生み出す土台を築くとともに、イノベーションを継続的に生み出す仕組みづくりにも貢献しました。クライアント自身が対話ノウハウを組織内に蓄積するプロセスも重視しています。

まだできていないこと

プラットフォームで生まれたアイデアが、共創のきっかけづくりに留まっているケースも少なくありません。事業化・社会実装まで長期的に伴走支援する仕組みは構築の途上にあります。策定した基準やアイデアを社会変革へ昇華させるには至っておらず、向き合うべき課題と考えています。

今後挑戦していきたいこと

プロトタイプングから社会実装までを一気通貫で支援する長期的な共創プロジェクトやエコシステムの構築を目指します。多様なパートナーと共に、食・ファッション・住まいなどライフスタイル領域全般で社会をより良くする具体的な選択肢を実装していきます。

地域共創プラットフォーム

地域共創プラットフォームとは

自治体や地域のハブ役が主体となって、地域間連携を目指す共創の場です。市民や企業、専門家が立場を越えて集い、創造的な対話の場「フューチャーセッション」を通じて、地域の課題解決や地域の魅力創出を狙います。自ら実装したい企画を生み出し、その企画を後押しするための関係性を構築し、持続的なエコシステムの形成を目指します。

Projects

とやま未来共創会議/リビングラボ運営支援

富山市では、多様な市民が対話を通じて理想の未来を描き仲間をつくり活動を生み出す「とやま未来共創会議」。富山市版スマートシティの実現に資する事業創出を支援する「リビングラボ」が行われています。詳細リンク：[とやま未来共創会議](#)



スポーツをハブに、住民と未来を描く地域づくり

住民の想いを元にしたアイデアをレノファ山口FCのリソースで実現し、地域イベントとして実施。地域内で新たなつながりが生まれ、スポーツチームによる共創型地域づくりを体現した取り組みとなりました。詳細リンク：[湯田温泉まちづくり温泉街活性化プロジェクト](#)



住民主体による地域づくり

小松市では「自分たちの地域を自分たちでつくる」のもと、市民・地域団体・企業・行政など多様なセクターが協力し、地域課題に取り組んでいます。イノベーション・ファシリテーター養成講座では課題解決を担う人材を育成し、地域での実践に繋がっていきます。詳細リンク：[小松市×FSS](#)



#1_問いやアイデアの提供 #2_共創の場づくり・運営ノウハウ蓄積 #4_継続的に共創できる仕組みづくり
#5_共創への出会いが増える #6_共創の力に期待が高まる #7_共創の場を作る人が増えている #8_共創活動にじぶんごととして取り組む人が増える



湯田温泉パーク構想段階からご一緒する中で、「地域の想いを対話から形にする」プロセスの重要性を実感しています。我々レノファの地域における役割は、人と地域をつなぐハブとして機能することだと考えていますが、フューチャーセッションズ様の「共創」との掛け算により、新たな地域の可能性や関係性が生まれていると感じています。これからも「プロスポーツ」×「共創」の力で山口の未来を共に創っていきたいと思います。

株式会社レノファ山口 専務取締役 内山遼祐様



Smart City TOYAMA

研修参加者の様々なバックボーンや強みを対話によってかけあわせることで生まれるアウトプットやその過程での交流に毎回刺激を受けています。FSSさんが各班でファシリテートしていただいていることも心強いです。今後、このような共創活動が実際の事業組成に繋がることを期待しています。また、この研修参加者が新たな気づきを得ながら実際にリビングラボを立ち上げて、自社で取り組んでおられるのも非常に良い傾向だと感じています。こうした自発的な取り組みが増えることを期待しています。

富山市ご担当者様

できたこと

市民が主体となるまちづくりを各地で支援しました。また、市民参加型プログラムでファシリテーターを育成し、参加者が次年度の運営サポーターになる好循環を生み出しました。住民が自ら対話の場を運営し、自走できるための基盤を構築し、現在も続く市民アクションが生まれています。

まだできていないこと

取り組みが意欲的な市民や特定テーマに留まることもあり、中心的なセクター以外の多様な主体を十分に招き入れられていない側面があります。また、多文化共生など地域にとって重要でありながら踏み込めていないテーマも残されており、より多様な人々が参画できる土壌づくりが課題です。

今後挑戦していきたいこと

今後も地域の方々自身がファシリテーションの担い手となり、多様な人々を招き入れながら自走するエコシステムの構築を目指していきます。人々がワクワクするような対話の場が地域のあちこちで自発的に生まれていくよう、ナレッジ移転やサポートのあり方を探究し続けていきます。

共創総会

#1_問いやアイデアの提供 #4_継続的に共創できる仕組みづくり

#5_共創への出会いが増える #6_共創の力に期待が高まる #8_共創活動にじぶんごととして取り組む人が増える

共創総会とは

共創を次の段階に進めていくために、私たちが”今”深めたいテーマを設定し、大切な方々をお招きした「共創総会」を半年に1回のペースで開催しています。実験的で自由な対話を重ねながら、「共創」について多角的に探ってきました。過去5回開催し、のべ参加者数は231名。私たちの大切な共創パートナーである皆さま同士のご縁をつなぎ、半日をかけてじっくりと対話をつくす場として開いています。

これまでの共創総会

2025.12 共創を拡張する：未来をつくる対話を促すMediatorの役割を探る

ハーチ株式会社と共催し、AI時代における対話の場とメディアの役割を「Mediator」という視点から捉え直し、共創の広がりを探りました。

詳細リンク：[共創総会#5](#)



2025.06 共創の根源：複雑化する時代に求められる共創を問い直す

株式会社オカムラと共催し、スウェーデンのFIKA文化も取り入れながら、いま求められる共創とは何か？を問い直しました。

詳細リンク：[共創総会#4](#)



参加者の声

偶発的な出会いから育まれる想定外の文脈の面白さ、新しさがありました

こういう場にいるだけでも自分が新たに形作られていくんだなと思った

共創には態度が大切であり、関係性の構築を意識したい

担当者の声

共創総会は、メンバー一人ひとりが大切なパートナーを招く場として設計しています。単なるイベント集客ではなく、信頼関係の延長線上に人が集まり、FSSのまわりにあるコミュニティの輪郭が少しずつ可視化されてきました。常連のように参加してくださる方も生まれ、参加者同士の新しいご縁がつながっていることにも価値を感じています。一方で、そこで生まれた対話や関係性、共創のはじまりは、同じ場にいた人にしか十分には伝わりきっていません。どうやって、その熱量や兆しを場の外にいるメンバーやパートナーとも共有し、次の共創につなげていけるかが、今後の課題だと感じています。

OUR FUTURES

- #1_問いやアイデアの提供
- #2_共創の場づくり・運営ノウハウ蓄積
- #3_共創の場に役立つツールキット開発
- #4_継続的に共創できる仕組みづくり
- #5_共創への出会いが増える
- #6_共創の力に期待が高まる
- #7_共創の場を作る人が増えている
- #8_共創活動にじぶんごととして取り組む人が増える

OUR FUTURESとは

OUR FUTURES は、各地で重ねてきたフューチャーセッションの実践を、誰もがひらき、つなげていくためのWebプラットフォームです。

新規事業、組織変革、社会課題の解決、まちづくり。さまざまな場面で、フューチャーセッションは必要とされています。

勇気を持って立ち上がった志ある人たちは、どんな想いでセッションを企画し、どう進めているのか。そこにどんな人が集い、どんな物語が生まれているのか。

企画にこめた想い、対話のプロセス、生まれた成果。その一つひとつを可視化し、知識として分かち合えるようにする。それが、OUR FUTURES で目指したことでした。ひとつのセッションが次の呼び水となり、新しいつながりや、未来へ向けた共創が生まれ続けていく。そんな土壌を育てていきます。

詳細リンク：[OUR FUTURES](#)



Topics

対話の設計が積み重なる場

OUR FUTURES は、フューチャーセッション開催者の企画と運営を支える基盤です。対話の場をどう設計したかという知見が、公開・非公開あわせて4,500件（うちフューチャーセッションズ企画数は約1,860件）を超えて蓄積されています。



過去の設計知を、AIが活かす

創造的なファシリテーションを後押ししています。積み重なった公開セッションのプロセスを、AIが分析し、設計知として活用できるように。セッションの企画者は、目的に合った対話プロセスの設計案をAIと共創してつくります。



担当者の声

OUR FUTURES は、セッションの知見が詰まった、私たちになくてはならない存在です。今後はAIの活用で、過去の知見からより効果的な新しいやり方を生み出すことを、もっと加速させていきます。一方で、社外の人々が自らセッションを立ち上げていく動きづくりは、まだ道半ばだと感じています。かつてのFuture Session Weekのような取り組みを、いまと未来に合った形へアップデートしながら、創造的な対話の文化を社会に広げることには挑戦したいです。

問い集2025

Future Sessionsメンバーが
2025年に注目した問いを、集めました。



宮武 洋一

どうすれば言葉にしづらい
モヤモヤから新しいものを
生み出せるだろうか？

リビングラボ研修の受講者がインタビューしてみた感想から、モヤモヤを無理に言語化しようとする対話の場にこそ、思いがけない発見があるのではと感じました。言語化ブームの時代に、あえて言葉にならない部分を抱えたまま場を共にすることも大切ではないかと思います。



有福 英幸

私たちは、異なる意見をもつ
他者とどのように
共生できるだろうか？

2024年度の三菱電機 東京大学 朝日新聞社と3社で実施している「未来デザイン車座対話」から生まれた問い。分断が加速し寛容さが失われつつある社会において、今後ますます重要となる視点で、2025年度はこの問いを深めるための社会システムを検討しました。



橋本 阿姫

どのように個人の凸凹と向き合う
ことで、前進する組織が自然と生
まれるのだろうか？

コミュニティや企業など多様な組織に、メンバーとしても場を整える立場としても関わりながら、立場が変わると凸凹の見え方も変わることを体感してきました。関わる側と場を整える側、それぞれの視点から何を期待し、どう伝えれば人の強みがかみ合うのかを、考え続けています。



上井 雄太

どうすれば、無関心層の人々が、
自ずとたのしみながら
地域や社会を良くするアクション
を踏み出せるだろうか？

スポーツの持つポジティブな力を活かしたソーシャルアクションの創造に挑戦してきました。正論や恐怖訴求ではなく、スポーツ・アート・音楽など心と身体に響く文化資本を通じて、無関心だった2:6:2の「6」の人たちが自ずと動き出せる世界をつくらうとしています。



富田 由衣

目の前の複雑さを、どう整理し、
どう伝え、どう信頼に変え、
どう社会への一歩にするか？

立場も言葉も異なる人たちが集まる現場には、常に複雑さがあります。その複雑さを整理し、人と人の間で翻訳しながら信頼をつくる。その過程に、私たちの役割があると実感しています。イノベーションファシリテーターとして、これからも共に一歩目を踏み出す場を作っていきます。



笥 大日朗

知的生産が人間の特権でなくなるとき、私たちは誰のために、何をつくり、そこにどんな喜びを見出すのか？

知的生産はかつて人間固有の営みでしたが、AIがそれを担い始めた今、「つくる」の意味だけでなく、つくり手と受け手の関係そのものが揺らいでいます。顧客すら人間とは限らない未来で、人間にとっての創造の喜びと生きる意義の新しい関係を探究し続けています。



坂本 悠樹

未来の前提が揺らぐ中で、
人や組織は何によって軽やかに
変わることができるだろうか？

社会不安や生成AIの急速な進化など不確実性が高まった2025年。地域・組織・事業の現場で「望ましい未来を描き、変化する」プロジェクトに伴走してきました。変化には恐れやストレスも伴うからこそ、多元的な見方に触れることが変化への向き合い方を広げると感じています。



宇野 芳記

対話は、どのような条件下で
“発想の飛躍”を生み出すのか
(感じさせられるのか)？

ワクワクする飛躍的なアイデアに本当に至れているかという課題意識を持ち続けています。発想の土壌や評価軸を整えても、制約に引っ張られがちな現実があるからこそ、一度制約を手放し「意味のイノベーション」を志向する対話の可能性を探り続けています。



最上 元樹

住民主体の
持続可能なまちづくりを
支える重要な一歩とは？

人口減少や高齢化が進む中、まちの持続可能性は住民同士が支え合い、共に未来を語れる関係性にかかっていると感じています。小松市での市民ファシリテーター育成に関わる中で、対話を通じて一人ひとりの魅力を引き出すことが、その関係性を育む鍵だと実感しています。



西山 なつ美

どうすれば私たちは、
その土地でしか生まれな
い循環の物語を育てられ
るだろうか？

複数の地域で資源循環ビジョンの策定・実証事業に伴走するなかで、どの地域にも再現できる正解モデルはなく、その土地ならではの物語を起点にできるかが鍵だと感じています。完成された制度よりも、共に創るその土地の物語こそが人を動かすと信じて、探究し続けています。

COLUMN

会社のハンドルを「共奏」で握る。 ソーシャル領域の事業組合「社会藝術舎」と これからのフューチャーセッションズ



アンドパブリック株式会社 代表取締役CEO

ハーチ株式会社 代表取締役

ひとしずく株式会社 代表

ひとしずく株式会社 取締役

株式会社フューチャーセッションズ 代表取締役社長

株式会社フューチャーセッションズ 代表取締役副社長

桑原憂貴

加藤佑

こくぼひろし

やまもとあさみ

有福英幸

寛大日朗

対話設計を専門としたフューチャーセッションズ、PRパートナーのひとしずく、メディアのハーチ、社会的インパクトマネジメントのアンドパブリック。2024年5月、ソーシャル領域でそれぞれ専門性を磨いてきた4社が共同出資し、有限責任事業組合「社会藝術舎」を設立しました。社会藝術舎は、互いを機能で補完し合うのではなく、同じ未来を見つめ、互いの音に耳を澄ませる「共奏」の場だといいます。本記事では、このユニークな連携がなぜ生まれたのか、そして価値観の共鳴からどのようなインパクトが生まれようとしているのか、各社による対談から紐解いていきます。

個人として信頼しあえる 緩やかなつながり

Q. まず、専門性の異なる4社が「社会藝術舎」として集うことになった経緯を教えてください。

有福：コロナ禍の時期あたりから、ソーシャル領域のプレイヤーは小さい会社が多いので、「連携して相互補完できると良いよね」という話をしていました。それが2022年頃から具体的になり、この4社の顔ぶれが見えてきたんです。

加藤：お話をいただいたとき、何より「全ての会社の強みが違う」ことが面白いと感じました。それぞれが専門領域を持っているからこそ、一緒になったら大きなインパクトになるだろうなど。

有福：ただ、私たちが目指したのは、単に機能として必要なものを取り揃えて連携しました、という話ではないんです。4社それぞれの事業は、必ずしも相互補完関係にあるわけ

ではない。それよりも、ソーシャル領域で事業展開していくうえでの根底にある思いや、目指したい方向、価値観の部分が合っている。それが重要でした。

インタビュアー：まさに、皆さんのオーラに近い雰囲気を感じます。

有福：面白いですね（笑）。会社という枠を超えて、個人として信頼し合えるか。そういう緩やかな繋がりから、何か新しいものが生まれるのではと思ったんです。

「助けて」と言える関係性は インパクトの源泉

Q. 価値観で繋がる関係性の中で、皆さんはどのような変化を感じていますか？

桑原：やはり「助け合える」というセーフティネットの存在は大きいですね。

事業性と社会性のバランスを取り続けるのは大変なこともあります。そんな時でも、ふと「今、こういうことを思っているんだけど」と相談できる場があるというのは安心です。

加藤：まさに「インフラ」ですよね。良いときもあれば悪いときもあるのが会社ですから。去年、私たちの会社が苦しい状況だったときも、皆さんがすぐに手を差し伸べてくれて、本当に助けられました。

こくぼ：その関係性があるからこそ、挑戦ができるんですよね。ひとしづくではあえて売上の上限を設定しているのですが、その規模でどうやってソーシャルインパクトを生み出していくか、という大きな問いがありました。でも、この仲間たちがいるから、「一社だけでなく、皆と一緒にインパクトを出していけばいい」と思えるように

なった。「助けて」と言える関係性、それ自体が僕たちのインパクトの源泉になっている気がします。

有福：フューチャーセッションズも影響を受けています。特に、自社の活動が生み出すインパクトを可視化するという視点。これまでは定性的な価値に頼っていた部分がありましたが、ハーチさんやこくぼさんが作るロジックモデルや、アンドパブリックさんの取り組みを見て、客観的な指標と向き合う覚悟ができました。このインパクトレポートも、社会藝術舎がなければ生まれなかったと思います。

こくぼ：その感覚を育てているのが、隔週の打ち合わせなんです。無駄に思えるようなやり取りの中でも、毎回必ず気づきがある。それぞれが今直面している案件の話も含めて共有することで、視座が変わるんです。

加藤：そうですね。目的やゴールがなくても、お互いが今何を考えているのかをインプットしておく。それだけで、ちゃんと4社でアラインできている感覚がある。関係性のためのメンテナンスであり、インフラになっていますよね。

こくぼ：まさに「オーケストラ」のイメージですね。共に創る「共創」であり、協力して奏でる「共奏」でもある。それぞれが違う楽器を持ちながらも、同じ方向を向いて、時には不協和音を鳴らしつつ、最終的には一つのハーモニーを創り上げていく。そんな関係性をデザインしたいです。

「対話のある社会」を創るためのハンドル

Q. その「共鳴」の中から、フューチャーセッションズの「対話」にはどのような可能性を見出していますか？

桑原：「言葉を交わすこと」の価値が、ますます大事になってくる時代だなと思っています。社会の大きな仕組みを変える前に、まず僕たちの職場やコミュニティでの対話の質を変える必要がある。その最も重要な役割を担えるのが、フューチャーセッションズさんだと思っています。

加藤：本当にそう思います。AIが瞬時に答えを出す時代だからこそ、私たちは「プロセス」にこそ価値があると考えています。そして、フューチャーセッションは、そのプロセスの豊かさを体現しているものの一つです。答えのない問いを参加者一人ひとりが当事者として探究し、ときには感情をぶつけ合いながらも、前を



ハーチ株式会社と共催した共創総会

向いて歩いていく。そうした関係性を育む「対話」の場は、人生を豊かにする上で不可欠です。このプロセスを専門的に担ってくださる組織と一緒にいることはとても心強く、大きな可能性を感じています。

有福：ありがとうございます。私たちにとって、社会藝術舎の皆さんは、まさに会社の進むべき方向を共に決めてくれる、重要なステークホルダーです。会社経営を車に例えるなら、アクセルとブレーキは自分たちで調節しますが、ハンドルは皆さんと一緒に握っている感覚。社外取締役のような形ではなく、フラットな関係で「おかしな方向に行かないようにする」というハンドルの意義は、非常に大きいと感じています。

寛：僕自身は、対話は手段であると同時に、最終的には「目的」にもなると考えています。「対話のある社会」そのものを創りたい。違いを前提に、それでも一緒に考

ひとしづく株式会社と協働した10周年の屋外イベントの様子



え続けられる社会。白黒つける前に「もう少し聞いてみようか」と思える小さな間が、暮らしのあちこちに息づいている風景です。でも、それは僕たちだけでは絶対に実現できない壮大な夢です。皆さんのような仲間がいてくれて初めて、その夢が現実味を帯びてくる。この関係性に心から感謝しています。



結論を急がない対話の時間が未来をつくる

Q. 最後に、この社会芸術舎という場から、これからどんなことを生み出していきたいですか？

有福：僕は、社会芸術舎を象徴する「オブジェ」のような、より多くの人々が社会芸術舎を知って関わってもらうきっかけになる物理的なものがあるといいなと最近思っています。リアルな手触りのあるものが、この

デジタルの時代にこそ価値を持つんじゃないかなと。

加藤：オブジェ、面白いですね！もともと社会芸術という名前はヨーゼフ・ボイスの「社会彫刻」の概念からインスピレーションを受けてつけたものですよ。意図を持って世界に介入しようとした瞬間に、誰もが芸術家になる。まさにいま、皆で世界を彫刻している。そのための「社会芸術家育成」みたいなこともいつかはやりたいですね。「育成」というよりも、誰もが自分は「社会芸術家なのだ」と気づく手助けをしたいです。

こくぼ：僕は、アート作品を作りたいです。例えば「100年後の地球温暖化の状態が体験できる部屋」とか。体感で「これはまずい」って気づかせるようなコミュニケーションの仕方もあるなと。あとは、一社ではなかなかやりにくい「研究」を、皆でできるといいですよ。

桑原：研究もいいですね！僕は、一人ひとりが自分の内側にある「意図」と出会えるようなきっかけを作りたい。この間、天草で食べた海藻がとても美味しかったですよ。その時、「この美味さを誰かに伝えたい」って強く思った。そういう、理屈抜きの衝動から、本当のインパクトは生まれるのかもしれない。

やまもと：桑原さんの話を聞いて、人が「楽しい」とか「良いな」とか、そういう感情が揺れる瞬間って、今も昔も人の中身はそんなに変わってないんだろうな、と思います。それを伝える手段や受ける形は時代の流れによって変わってくる。でも、その根本になっている部分っていうのは普遍的で変わらないですよ。最近、ネイチャーポジティブをテーマに、自然を過去に戻すことが正しいことなのか、と考えていて..

インタビュアー：社会芸術舎の打合せではいつもこういう話をされているのだろうな、と体感しました。

この話がどこにつながるかわからないけれど（笑）、それが大事な時間なのですね。

有福：そうなんです。こういう対話って、結論を急がないんですよ。でも、それで良いんだと思います。ここで生まれた新たな問いが、それぞれの活動に持ち帰られて、いつか何か違う形で実を結ぶ。対話そのものが目的化するというのは、そういうことなのかもしれません。特別なことではなく、当たり前こういう時間が社会に生まれていくようにしていきたいですね。



未来の兆し

「対話によって生まれる社会変化を、
どう未来への力に変えていけるのか。」

創業から、私たちが活動を続けてきた約15年の間に、社会は大きく変化しました。気候変動や人口減少、AIの急速な進化。情報があふれる時代の中で、人々の価値観は細分化され、社会はこれまで以上に短期的な「わかりやすさ」を求めているように感じます。

その一方で、現場では、未来に向かう新たな兆しにも出会ってきました。効率や競争だけでは限界を感じはじめた企業が、異分野との共創へ踏み出していること。地域の資源や文化を再編集し、未来を描き直す動きが生まれていること。大量消費から、循環や再生、共有を重視し、新しい豊かさを模索する市民が増えていること。そして、AIが進化するほどに、人間にしかできない「問いを立てる力」や「対話によって関係性を編み直す力」の価値が、浮かび上がりはじめていること。

これからの時代に必要なのは、単一の正解ではなく、多様な人々が違いを持ったまま知識や経験、感情を持ち寄り、未来を共につくり続ける力です。未来は、与えられるものでも、予測するものでもなく、多様な主体が関わり合いながら、自ら編み出すものへ変わりはじめています。だからこそ私たちは、対話を通じて人と人、地域、社会をつなぎ直し、新たな挑戦や選択肢が生まれ続ける「未来のインフラ」を社会に実装していきます。

分断や閉塞を越え、異なる価値観が交わることで、新しい可能性が立ち上がる土壌を育てること。それこそが、次の時代に必要な共創の基盤になると、私たちは信じています。

編集・発行 株式会社フューチャーセッションズ
協力 味の素株式会社
アンドパブリック株式会社
株式会社レノファ山口
カルチュア・コンビニエンス・クラブ株式会社
小松市
住友化学株式会社
富山市
ハーチ株式会社
ひとしずく株式会社
有限責任事業組合 社会藝術舎
芙蓉堂
撮影 発行日 2026年6月末日